

この人の闘(いき)

講演会対策プレゼン『この人の闘』 川名如廣

1 はじめに

このプレゼンは、『この人の闘』をもとに、登場人物であり「この人」である真紀さんを中心に行っていく。

2 あらすじ

37歳のサラリーマンである「ぼく」は、小田原へ人に会いに行く。しかし、相手は約束を忘れ出かけてしまっていた。時間つぶしに大学の映画サークルでひとつ上の「真紀さん」の家を訪ねる。ビールを飲んだり、草をむしったりしながら、映画や、読書、子育て、亭主のことなどを話していく。

3 真紀さんの生活

38歳となった真紀さんは、社会の規格から外れた人間(注1)ではない。そのために、自分でも「浮草のような人たちに囲まれてた頃の自分とのギャップにいまだに悩みそうになる」と言う。では、真紀さんは普遍的な主婦となり、学生の頃の真紀さんとも違ってしまったのだろうか。

家族 夫については、嬉々として仕事をし、自分もチェスの駒であることを忘れ、人をチェスの駒のように動かすことを、理解できなく嫌いだという。それでも「結婚する前に好きだったのと違うふうに好きだし、あの頃といまとでどっちがあの人のこと好きかって言えば、いまの方が好きなんだと思うよ。」と述べ、雨が降れば駅まで車で送っていく。子供につい

ては、家に上の子と下の子が一度に友達を連れてきたときに、「まあ、一番子育てを実感するとき」という。そして、子供に対しては「そうなのよ。おかしなところよね。家って。自分でもずっとそうしてたわけだけど、でていくときはまあ、いちおう『いってきます』って言うけど、帰ってくるときはフッと帰ってくるからね。で、しまいには大きくなって平気で家を空けるようになってるのよね。」といい、普遍的な母親がしゃべったかのようで「ぼく」を少し悲しませた。真紀さんは妻としても、母としても、仕事をこなすが、「真紀さんのいる場所はいまこの自分の家庭の中心ではなく、家庭の'構成員'のそれぞれのタイム・スケジュールのすき間のようなところ」である。

ビデオ(映画) 真紀さんが見る映画は、映画サークルで見るようなその手の映画ではなく、「この辺のビデオ屋さんに置いてあるようなのしか」見ていないという。見る数は「30分番組を見る感覚でみて」いて、昔よりも見ている。ただ、家事の合間に映画を見るということは「昔から昼過ぎの夕食の仕度の前までの時間帯は主婦がなんとなく懐古的な気分になって映画を見たくなる時間」のためではない。「昔一度見た映画を見るのといまの映画を見るのは別なのよ。だんだん借りるものがなくなってきて、『死霊の盆踊り(注2)』なんていうのまで見るようになると、どうかしてくるような気がするわよ。」「もうほとんど全編、その場その場でできてるでしょ。脚本なんか全然練ってないし。それがいいのよね。」

言葉 草むしりをしていると話がクローンのことに及ぶ。そこで「ぼく」は真紀さんの「ふうん。三沢君って、昔からけっこうヒューマニスト的なところがあったわよね。」ということばに、悲しいような気持ちをおぼえる。これは言葉に対して敏感であった真紀さんなら「'ヒューマニスト的'というような安直な言葉は使わない」はずであるからで、記憶とのずれを感じたからである。ところが、パソコンでの仕事は作業を続けるよりも中断するほうが難しいという話になったとき、「便利な機械を発明したものねえ」という真紀さんの言葉で「ぼく」の悲しさはきれいにきえた。「便利」という言葉が「会社にとって便利」という意味であるからである。

読書 真紀さんの読書は、「ページをめくる満足感」を伴わず、最低限の筋があり、読むのに時間のかかる本を選んでいる。長い話を読むのは、次に何を読むかに迷わないことであり、読むのを中断されるのに抵抗を感じないことであり、緩く出来ていて生活のテンポに合っているからだという。小説だけでなく、哲学も読む真紀さんは、これからも本を読み続けるはずであるが、「感想文やレポートを書くわけじゃない」し内容を人と気軽に話すわけではない。真紀さんが読んだ内容や考えたことは、「頭の中だけに保存されていって、それで、死んで焼かれて灰になって、おしまい」になってしまう。

4 真紀さんの世界観

イルカやクジラは知能が高いと言われている。しかし、その知能が人間とは別の方向に伸ばされているのだとしたら、人間と同じ物差しを使って比べてもわからないと真紀さんはいふ。そして、ヨハネの福音書を引用する。「『始めに言葉があった。言葉は神とともにあった。言葉は神であった。』（中略）全てのものは言葉によって造られて、言葉に命があって、その命は人の光で、光は闇の中で輝いた。闇は光に打ち勝たなかった。」

「だから言葉が届かないところっていうのは'闇'なのよね。そういう'闇'っていうのは、そこに何かがあるんだとしても、もういい悪いじゃないのよね。何も無いのと限りなく同じなのよね」といふ。「言語化されなければ人間にはそこに何かがあるかわからない。何かあっても人間には理解できない。言葉が届かないということは、何も無い状態と限りなく同じである。」と「ぼく」はたどり直し、これはイルカについてのことではなく、真紀さん自身のことであると考えた。そして、「ぼく」は平城京の何もなくなっただだの条理の形跡をとどめるだけの平らな土地に立ち、真紀さんならこの平城京の時代に生きた人たちのざわめきが聞こえそうな土地も、ただの空白でしかないというのだろうか、考えた。

5 おわりに

鬮とは辞書には、門戸の内外を区切るもの、心理学であることが意識されるか否かの境目とある。真紀さんにとっての鬮は、家族のことと自分だけにため込む時間の境目であると思われる。この鬮は子供の帰宅や、急な天候の変化といった家事で自分の意志とは関係なく、通らされてしまう。真紀さんが消えてしまえば、その存在すらなかったことになってしまう部分、言葉の届かない'闇'に着目したい。

注

1 『アウトブリード』P.20

2 『死霊の盆踊り』原題：ORGY OF THE DEAD 米・1965年・91分・
原作・脚本 エドワード・ウッドJr